



映画で描かれた世界が “実際にあるもの”として感じられる

武重洋二(美術監督)

1964年、フィラデルフィア(アメリカ・ペンシルベニア州)出身。91年にスタジオジブリに入社。95年に美術監督となる。美術監督を務めた主な作品は『もののけ姫』『千と千尋の神隠し』『ハウルの動く城』『ゲド戦記』『借りぐらしのアリエッティ』『君たちはどう生きるか』。今年発売されたスタジオジブリの劇場公開全作品の背景美術を一冊にまとめた書籍『スタジオジブリの美術』の監修も担当した。

特に「地球屋」(青春の丘)は見事に再現されていて、本当にすごい。随所に本物が置いてあり、やっぱり本物がもつ存在感にはなかなか及ばない。アニメーション映画で絵を描く場合は、空間の中で「どういう色合いでどういう質感なのか」と考えていくので、再現しているとほいえ、まったく別物の存在感。「ハウルの城」(魔女の谷)のハウルの寝室なんかも、世界中からいろんなものが集められていて、スタッフのこだわりが強く感じられました。僕も宮崎吾朗監督(ジブリパーク監督)に依頼されて描いた絵が、「魔女

絵では表されない 本物がもつ存在感

僕は仕事で行き詰まるといふか、よく散歩をするんです。この公園は植物の種類も豊富なので、植物に詳しい方に教えてもらひながら歩くと、また新しい発見があるのでしょうね。ただし、結構な距離を歩くので、歩きやすい靴は忘れずに。

僕は仕事で行き詰まるといふか、よく散歩をするんです。この公園は植物の種類も豊富なので、植物に詳しい方に教えてもらひながら歩くと、また新しい発見があるのでしょうね。ただし、結構な距離を歩くので、歩きやすい靴は忘れずに。

公園の展望台では、空や緑とともに「ハウルの城」(左奥)などの景観を楽しめる

ジブリパークは緑に囲まれているので、展示に限らず、気軽に来てそぞろ歩きをしながら、愛・地球博記念公園でお弁当を広げて、楽しむのもよいですね。公園の大芝生広場から向こうに「ハウルの城」が見えていて、緑が多くて空が広い様子は、絵に描きたくなるような素敵な景観でした。

絵に描きたくなる 公園の素敵な景観

平面で描かれたものを 単に立体化はできない

ジブリパークのようにアニメーションを実際の空間に表現する試みは以前、実写映画の美術監督アリエッティのセットを作るという展覧会でやっていました。その時に種田さんが、「背景に描かれているものを並べただけだと隙間ができるしまうから、展示物とするにはいろんなものを増やしていかないとダメだね」という話をしていたのを覚えてています。ジブリパークでは一つ一つの展示がこだわりながら配置されていて、よどぎでいるなど感じました。

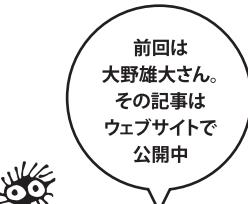
また、各展示を見ていると、平面で描かれたものを単に立体化して作られていて、いろいろ発見があります。例えば、新人だったところの「サツキとメイの家」(どんどこ森)は、自分が何気なく描いた建築の構造などが想像していたより意外と狭かったんだなどいう気づきがありました。

『となりのトトロ』の制作時に、宮崎駿監督から美術スタッフに「子どもが見ても名前がわかる植物を描いて」という依頼があり、ヒメジョオンやオオバコなどを描いていました。監督は不思議な世界を描かれますが、それは私たちの身の回りにあるものからヒントを得て発想が加わってできあがっていくもの。ジブリパークでも「映画に出てきたあの植物だ」といった楽しみ方ができると嬉しいです。



映画に出てきたものを探してみる楽しみ方も

『となりのトトロ』の廊下と「メリーゴーランド」に飾られています。今回実際に動いているものを見られて、ようやく実感が湧きました。



前回は
大野雄太さん。
その記事は
ウェブサイトで
公開中



チケットは予約制

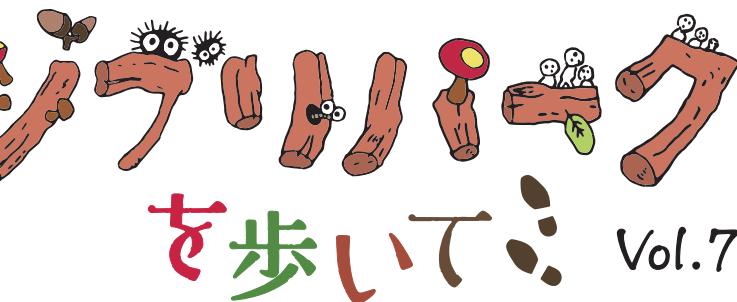
© Studio Ghibli



「サツキとメイの家」(どんどこ森)で
実際の空間を体感する武重さん

また、宮崎監督はいつも「映画には鮮度が必要だ」と言います。

同じことをやっていてもお客様は飽きてしまうから、その都度新しいものをという想いは、都度、展示が新しくなっていくジブリパークにも通じるものがあります。何度訪れても新しい発見がある。そんな場所になつていってほしいですね。



を歩いて:
Vol.7

スタジオジブリ作品の背景美術を支えてきた美術監督の武重洋二さんがジブリパークを訪れました。描いてきた世界が目の前に広がるジブリパークを巡り、どう肌で感じたのかー。ジブリ作品の制作秘話交えて語ります。